

No.1114

平成20年5月1日号 (毎月2回1・15日発行)
昭和50年9月4日第3種郵便物認可

じゅん刊 世界と日本

講演録

アイデアと気迫を持ち決断

— インドで成功する秘訣は —

東京懇談会・四月例会

インド・アジア開発(有)取締役

清 好延

株式会社 内外ニュース

No.1114号 平成20年5月1日号(毎月2回1・15日発行)昭和50年9月4日第3種郵便物認可
じゅん刊 世界と日本 定価 630円 年ぎめ(送料共)15,750円(消費税込) ISSN 1343-5035

正しい言論で 希望ある国に



東京電力

電気は
貯めることが
できません。



ですから真夏などの高需要期になると、いくつもの発電所が一杯フル稼働ということになるのですが、それでも品切れというわけにはいかないのが電気。火力、水力、原子力などさまざまな発電方式をバランスよく組合せ、常に万全の態勢を整えていなければなりません。延々何万キロもの送電線を守るため、昼夜を分かたず点検・保修を繰り返すのももちろんそのため。そうした日々々の活動に支えられて、世界でもトップクラスといわれる高品質の電気が、今日もお手元に届けられます。

www.tepco.co.jp

正しい言論で
希望ある国に
—— 今年のテーマ

VIEWSPAPER

会員制 会費年額 210,000円(前納・消費税込)

週刊・旬刊「世界と日本」

懇談会 東京 関西 札幌 釧路 函館
青森 八戸 仙台 山形 茨城
新潟 金沢 富山
神戸 名古屋 岡山 尾道
広島 周南
山口 松山 伊予三島
福岡 北九州 長崎

購読制 週刊・旬刊「世界と日本」
年額 各15,750円 (前納・消費税込)

株式会社 内外ニュース 取締役会長 清宮 龍宏
取締役社長 林 宏

世界の動きを日本に
日本の声を世界へ

信条 正論・正報道・正解説

目 次

ごあいさつ

清宮 龍 - 2

講演録

アイデアと気迫を持ち決断

インドで成功する秘訣は

— 東京懇談会・4月例会 —

清 好延 - 6

20年住んでみないと - 8

多い間違ったインドの紹介 - 16

日本の総合力が参考に - 25

レベルが高いソフトウェア - 34

興味示すムンバイ・デリーコリドー構想 - 41

インド進出は全社を挙げて - 46

南無とナモーという言葉 - 53

ごあいさつ

内外ニュース会長
清宮 龍

この会は、1月の森喜朗元総理から毎月、政治家がスピーカーとしておみえいただけます。きょうは、全く趣を変えまして、インドの専門家の清さんをお迎えいたしました。

清さんとは、振り返ってみますと、ここに来ておりますけれども三菱商事の私の後輩 と言ったらいいのかな のご縁である勉強会に行きまして、そこで清さんの話を聞きました。われわれの知らないことを実によく知っておられる。それは当然でありまして、外語のヒンズー語科を出られましたから、三菱商事ですつとこの道一筋、インド問題に携わってきて、ほとんど向こうで過ごしておられた。

会社を退かれましてもインド 日本を往復しながら と言いましても日本には、1年のうちに1カ月おられるかどうか。今、司会の者がご披露しましたように今回も2週間だけということと日本に来ておられる。その貴重な時間を割いて、きょうは話を伺うことになりました。

インド問題というと、皆さん方も非常に關心はあるけれども、その深層にあるものがなかなかつかみきれない。われわれが知っていますのも、BRICSという言葉。いずれ世界経済を引っ張っていくであろうという国々、その4カ国の名前を聞きましたのが確かもう10年くらい前になるでしょうか。しかし、そのBRICSが今後どのように発展していくのか。それは個々の国の状況もありますので、はっきりはわかりません。ただ、こういう国々が世界の中で実際にどれだけの役割を果たしていくのか。これもインドの専門家である清さんから、きょうはじっくり話を伺えると思っております。

そのほかに、インドに関連したニュースで最近、タタという自動車会社が宗主国のイギリスのジャガーを買取った。これもびっくりいたしました。そんな

ことが現実問題として起こりつつある。これは大変なことだと思いましたが、
も、その背景にあるものが私はよくわからない。どのくらいの資金力を持ってこ
ういうことが行われているのか。と同時に、そのタタが20万円の国民車をつくっ
て売り出している。現地の人たちがそれをどういうふうに使っているのか。また、
どの程度のレベルまでそれが普及して、これからどう発展していくのか。同時に、
日本の自動車メーカーもスズキはじめインドに進出していますので、大変な自動
車の競争社会になるのじゃないかという気もいたします。

それから私の非常に浅薄な知識で申し上げますと、インドというところばりカ
ースト制度、これもよくわからない。ある意味ではカースト制度というのはマイ
ナスイメージで捉えられている部分があるのですが、清さんに聞きますと必ずし
もそうではない。これによって社会が棲み分けられている、分業の形態になっ
ている。そのプラスの面もあるのだというようなことも伺いました。

あれやこれやたくさんお聞きしたいことがありますけれども、まず、清さんの
話をじっくりお聞きいただいて、そしてインドで皆さん方が仕事をされるうえに

どういう点が一番大事なのか。こうすれば成功間違いなしと言えるかどうかかわりませんけれども、その辺の秘訣もきょうはお聞きいただければと。こう思っているところです。それからもう一つ、清さんに伺いましたら「どんな質問でもお答えしますから」と。おっしゃっていますので、講演が終わりました後も、皆さんから質問を出していただければと思っております。

それでは、清さん、早速、お願いいたします。（拍手）

講演録

インドで成功する秘訣は

アイディアと

気迫を持ち決断



-ス

インド・アジア開発(有)取締役

清
好延

東京懇談会
4月例会

清（せい）という名前が変な名前なのです。さんずいに青と書いて清と読みますが、これは静岡県の富士宮市に今は編入されております芝川村というところにあつた姓です。もう一つ、九州の指宿のほうに清というのがあるのです。この二つの清が同時多発的に起こつたのが、一つのが分かれたのかというのはまだ私、調査を完了していませんので何とも言えないのですが、そんなバカな話をしなくてもいいのですけれども、実は執権の北条に追われて、日蓮が富士川を上つて身延のほうへ逃げていく際に、この芝川村を通つたのです。うちの先祖は日蓮を匿つて庇護した。一夜か二夜か知りませんが、宿を貸したらしい。うちの先祖は鎌倉時代に大内という名前を名乗つていらしいのです。それが名前をくれた豪族に聞こえていきまして、執権から日蓮を庇護することはまかりならんという通達が出ていたようで、うちの先祖が呼ばれて、「日蓮を匿つているだろう」「匿つてない」という押し問答になつた。その時にうちの先祖は身の潔白を証明しますと、いただいていた大内という姓を返して、身の潔白を表す、清^aというのに名乗り直したという詐

欺みたいなことをやったと私は小さなころ聞かされております。

20年住んでみないと

縁ありまして東京へ出てきて、杉並区の都立西高という高等学校を出て、東京外国語大学のインド・パキスタン語科へ入ったのですが、なぜその科を選んだのか。入学したのが1年浪人しており昭和33年、1958年です。実は西高に入った時に出席簿はアイウエオ順で並べられていたのです。私の後ろにいたのがオリンピックの田島直人（ベルリンオリンピック陸上三段跳び金メダリスト）の息子の田島亘裕（わたる）というワルで、後ろからトントンと背中を叩いて、「おい清、お前大学どこへ行くんだ」と。西高は受験校だったから、すぐ大学の話題になるわけですね。その時に私がとっさに答えたのが「俺は1年浪人して、東大の理 外語大のインド語に行く」と、こう言っちゃったのですね。論言汗の如し^aと言いますが、君子でも全然ないのですけれども、やっぱり男ひと度口になると、それは訂正できない。当

然、東大のほうは難しかったから入れなくて、外語大に入っちゃった。

入ってみたら、これは一度、学生の間はこのインド語が話されている場所をみてみたいという気持ちが出てきて、外語の学生3人と日印親善学生使節団というものを結成し、教授会のOKをもらい、一部上場企業150社ぐらいを回り協賛金を集めて、その当方で150万円ぐらい、今で言うと1千万円超えているお金じゃないかと思いますが、それで1961年、小田実が『何でも見てやろう』を発表した2年後、インドへ向かいました。船で21日かかりカルカッタに上陸しました。カルカッタでその当時の三井物産にお世話になり、インドを一周、その当時は3等の汽車がありました。今はインドは2等までしかないのですが一周して、カルカッタへ帰ってきて、その時感じたのが、この国は20年住んでみないとわからないのじゃないか、という感想を持ったのです。

それであんまり真面目に勉強していなかったものですから、6年かかって外語大を出て、ということとは2年落第して、縁あって三菱商事に受験した。

内定の電報が来て、その当時はまだ電報なのです。その電報をつかんで翌日、人事部長の方に会い、「内定の通知いただきましてありがとうございます。ただし、私のほうとしても条件がございます。5年以内にインドへ出していただけなければ会社を辞めますが、それでもよろしゅうございませうか」と。こう人事部長に掛け合いましたら、岡山（信次郎）という人事部長が「いいでしょう」と破顔一笑、受けてくれた。本気で彼が受けたかどうか知りませんが、鉄鋼輸出部というところに業務部経由で配属され、カルカッタ、ニューデリー、ニューデリーと3回にわたり16年インドにおりました。

その後、会社を辞め、JICAの日印調査委員会の事務局長をやっている時にJICAから、インドへ行つて対印投資促進という仕事があるのだが、やってくれないかという話があつて、JICAで3年、合わせて19年。それが終わりましたら、三井金属のほうから、うちはあそこで会社をつくつて工場をつくるのだけれども、それをお手伝いしてもらえないかと。その三井金属のオートバイ用の触媒をつくる工場の立ち上げをやり、これがうまい具合

に予定よりも数カ月短縮して完成して、大成功でした。その噂を聞いて、三井化学から、今度、うちも向こうへ出ていくので、うちに来てくれということとで、もうこの年（昭和13年生まれ）ですから、今年古希になります。体のこともあるし、「半年契約にしましょう。半年、半年でエクステンション、エクステンションして、マキシマム2年という格好でどうでしょう」と言ったら、「それでいいでしょう」ということで、今、インドへまた行ってあります。最初の6カ月が終わり、次の6カ月のエクステンションに入ったところでして、あと1年半ぐらいはインドにいるのじゃないかなと思います。通算しますと22年目ぐらいになるのですか。ということとで20年いなければわからないだろうなと言ったところ21年いるのですから、多少インドのことが最近わかってきたかなというのが私です。

インドを考える時に、われわれは日本人の通弊として歴史的な視点がついつい抜けてしまうところが多いのです。日常のことにかまけて、歴史の流れの中で今、自分がどこに立っているかということをつい忘れるのが日本人な

のですが、その辺でインドのことをちよつと考えてみたいと思うのです。この地球上をながめた時に1980年代の後半、というかその時代に世界に3つ社会主義と称される国がありました。ソ連、中国、インドなのです。この3つの国に偉大な為政者、リーダーがいたのです。1人はゴルバチョフ、1人はインディラ・ガンジーで、中国には小平というのがいた。この人たちがそういう国を引つ張っていた。引つ張りながら、彼らは気がついたのですね。いろんな機会に外をみると、自分たちが外国へ行くと自分のスケジュールが寸分違わず5分刻みで流れて動いていく。その3人が自分の国で動く時も寸分違わず5分刻みでスケジュールは動いていくのです。外国の場合は、自分が行っている時に自分のスケジュールだけじゃなくて、一般庶民のスケジュールも同じように寸分違わずどうも動いているようだ。振り返って自分の国のことを考えてみると、自分のスケジュールは寸分違わずだけれども、その裏で、一將功成つて万骨枯る。何千人の人たちが不自由をかこつて、インディラ・ガンジーのスケジュールのために、ゴルバチョフのスケジュー

ルのために犠牲になつてゐる。その現実気がついたのですね。

それで何とかしなければいけないということで、ゴルバチョフは「ペレス
トロイカ」。国の再建、再検討をやつてみないと、この先10年〜20年このま
まの体制でいったら資本主義国との間にものすごい差ができてしまうと、気
がついたわけです。○小平は何を言つたかというところ、どうも中国人の背景に
あるものと外国の背景にあるものは違ふようだ。当時、彼は「外国文化の学
習」を言つたのです。要するにその背景にある外国文化を学習しないと、相
手が要求しているスペックのものが中国ではできない。ハンカチ一つについ
ても汗が拭ければいいというようなのは商品価値がなくて、角がきちつと
直角で、しかも斜めに縫い代が入つてゐるようなハンカチでなければ、日本
ではハンカチとして通用しない。中国式のただダーツと縫つて、ほつれない
ように止めてあるのは布巾か雑巾の部類になつちゃう。それにはやっぱり外
国の文化の背景を、ということがあつて、盛んに「外国文化の学習」を○小
平が言つた。インディラ・ガンジーは何を言つたか。「最新技術の導入」を

やらないと、自分の国は何千年来の伝統的なものだけで生きていくというよ
うなことになるてしまいだんだん差がついてくると。

3人の為政者がこの点に気がついて、ソ連はペレストロイカを推し進めた
結果、ロシアになった。○小平が外国文化の学習と言ったのを実践していく
と、年寄りの方々は文献を読み、映画を観、CDを聴き、そのころはなかつ
たと思いますがDVD、そういうことで学習すればいいと思ったのだが、若
い人たちは学習することは実践ということに結び付いていくわけですね。デ
イスコもやり、選挙もやろうということまでいって、天安門までいっちゃつ
たのを中国は今、一生懸命抑えている状況にある。インディラ・ガンジーは
彼女の理想を実現する前に暗殺されて死にました。けれども、彼女が言った
最新技術を導入というのは官僚に指示してありますから、その後7年かかっ
て1991年にインドの門戸開放、それまでのマハトマ・ガンジーの思想に
基づいたセルフ・リライアンスというものから、インターディペンデンス、
要するに自給自足、自立というところから国際相互依存という方向に180

度転換したのです。この3つの社会主義国が地球上からなくなつたわけですよ。中国はまだ共産党が牛耳っておりますが、やっていることは、どうも今までの共産主義の考え方と全く違うようなことを許してやらせていますので、もちろん住居の自由だとか、土地の所有の自由などは中国ではまだまだ認められておりませんが、一応、市場経済が動く程度にまでは……。

ですから80年代から90年代になつて、この地球上の歴史が大きく変わったという認識を持つ必要があるのだらうと思つたのです。日本でもあの有名な朝日新聞は一言もこのことには触れていないですよ。糸井重里がジャイアンツの優勝を予言しながら、できなかつた時に丸坊主になつて銀座を練り歩いたくらいの気概を朝日新聞に私はぜひ持つてもらいたいなと思つたのだが、社会主義的、共産主義的な生き方が善である、それが真実であると言つていた朝日新聞が、そういうものが全部なくなつた後も一言も弁解していただけないという日本という国にわれわれ住んでいる。歴史認識に対して日本は非常に甘い考え方を持っている国だと思ひます。

多い間違ったインドの紹介

インドと日本の関係についていろんなことが今、言われていますが、非常に間違った紹介が日本でされています。例えばインドの人たちは2桁の掛け算の九九がみんな頭に入っているかのような報道がされております。私は今まで二十数年の間、おそらく千人じゃ足りず万人のオーダーのインド人に会ったと思います。その中で2桁の九九がスラスラできて、計算が早いインド人というのは1人かな…というぐらいしか会っていません。冷静に考えてみますとインドの識字率、大体識字率という言葉は日本ではもう死んでおります。日本で字が読み書きできない人に会ったのは、私が高校の時、一度。弟がちよっと問題を起こし、警察署にもらい下げに行った時に、隣に来ていたおやじさん、私の件には関係ないのですよ。お巡りさんに対して「俺はタナカイチロウというんだ。たんぼの田にまんなかの中と数字の一と郎だ。書け」と言うのです。「俺は字が書けねえ」と。私はその人が初めてです。

インドは識字率が今、6割だと胸を張っています。インドの識字率の基準は、数字が読めて、自分の名前が署名できれば字を知っているほうに分類するということです。ですから本当に読み書きができる人は6割じゃなくて、おそらく4割ぐらいだろうと思うのです。でも、独立当時5%か10%しかなかった識字率をそこまで上げたというのはすごいことなのか、そこまでしかならないのがちょっと問題なのか、いろんな見方はあると思います。識字率が公式発表では6割、本当に字の読み書きできる人が4割程度かなあと考えた時に、10人のうち8人ぐらいが2桁の掛け算ができるかのように日本で報道している日本のマスコミというのはいかにいい加減にインドを紹介しているかとガツクリしますね。

インドへ行きますとおつりが計算できない人がたくさんいますので、買い物した時に非常に困るのです。日本と同じように例えば1000円出して550円の買い物をする、「はい、450円のおつりです」とはインドではいきません。1000^{ルピー}出して550^{ルピー}ですと言った時は、「550^{ルピー}」と

まず向こうが言うのです。それに50ピ足して「6000ピ」と言うのです。あと1000ピ札を1枚ずつ出して7000ピ、8000ピ、9000ピ、1000ピ。向こう側に見れば、要するに10000ピの品物でちゃんと1000ピになったという対価はやりませんが、おつりが幾らだったかということとは認識がないのです。結果的に450ピちゃんとおつりがあります。その計算は10000から550を引いて450ではなくて、550のものをあなた買いましたね。これであと50ピ足して6000ピです。で、1000ピずつ足して行って10000ピになりました。それでは、その品物を持って行ってください。こういうやり方ですから、おつりの計算をしないのです。そういうおつりをまともに計算できないインド人が非常にいるところで2桁の掛け算がどうしてできるのだろう。何で日本のマスコミはそういう紹介の仕方をするのだろうと、こういう気がします。

その一方で、例えば日本で使っているアイウエオがサンスクリットの音韻表を借りたものだ。しかも、それが日本で大体9世紀から11世紀の間くら

いにでき上がったものだということは一言も説明しないのです。話が飛んで申しわけないのですが、菅（直人）さんが四国の八十八カ所めぐりやりましたよね。あの時に笠を被っていて、その菅笠に書いてあるのが「同行二人」という言葉だったと思います。インドのタクシーに乗りますと、インドは接触事故が非常に多くて、交通事故が多いのです。インドに行った方はおわかりと思いますが、宮本武蔵は『五輪の書』で「見切り三寸」と言いましたけれども、インドの運転は「見切り一寸」です。自動車対自動車、人間対自動車、全くそうです。道を歩いていて、ミラーが私のところに触るなんてしょっちゅうです。そんなものは別に問題でも何でもない。そういうところでタクシーを運転していますと、運転手は車を借りてやっていますので、接触事故を起こしてタクシーが傷になると所有者から怒られるわけです。そういう交通事故は嫌だから交通事故の魔除けの言葉がいろいろ書いてある。

その中の一つに「マターデー・キ・ガディー」と書いてある。マターデーというのは「女神様の」という意味です。ガディーというのは「車」、

「女神様の車ですよ」と魔除けに書いてある。そのほかに書いてあるのが面白いのですが、インド人はシャレが大好きでして、「297」と書いてあるのです。297はどういう意味かという点、これをインド語で読みますと2は「ドウ」、9は「ノウ」、7は「サート」、「ドウ・ノウ・サート」。2は2です。「ノウ」というのは人間なんかを表す複数形。「サート」というのは一緒という意味なのです。「2人一緒」という意味なのです。力車の後ろにも「297」と書いてある。最初はああ、恋人同士のことかなと思った。ところがどっこい、そうじゃないのです。車には「女神様の車」と書いてあるのです。女神様というのはインドのどぎつい、ものすごく残酷なことも平気でやる女の神様なのです。それと一緒に私は走っていますよということとは、「297」の2というのは運転手と女神ということなのです。要するに女神様と一緒に走っているから事故がないようにと。

八十八カ所めぐる時に「同行二人」と書いてあるのは、空海と私が一緒に旅をしているのですよ、というこの神と一緒にいつもあるという思想、これ

はインドから日本に来ているのですよ。そのくらいインドの日常的なことが日本人の日常的なところに入り込んでいる。

言葉のうえでは、仏教関係の言葉というのは何百種類と日本語の中に入っている。あまり紹介されていませんが、タバコだとか、サイコロでもいいのですけれども、こちら側の人がよく言うのは「サラ」という言葉です。新しい、真つさらの「さら」です。この「サラ」というのはインド語で「完全な」という意味。英語にもそういう意味がありますが、これもインドから日本に入ってきているのではないかなあと 생각합니다。そのほかに皆さんがお気づきになっていないけれども、向こうから入ってきた言葉や考え方がいっぱいあります。例えば「白虎」という言葉。インドでは白象だとか、白いものが珍重される。その伝統が流れ流れ着いて、日本では大黒様の白ねずみだとか、白うさぎだとか、白がやっぱり尊ばれるのです。その一番上に来るのが白虎、白い虎です。インドでも白い虎は非常に珍重されている。カルカッタやニューデリーの動物園に行きますとホワイトタイガーは一つの売りになって

います。この白に対する崇拜もインドと日本は同じです。

私がカルカッタにいた時にちよつと南ですけれども、オリッサから出てきたメイドを使つておりました。顔のつくりが結構きれいなのです。ある時、私がベンガル州出身のサハーというドライバーに「うちのアーヤはきれいじゃないか」と言つたら、サハーは、真つ黒の顔の人ですよ、ベンガル人でも。「あれは色が黒い」と言つたのです。日本も同じなのです。色の白いは七難隠すと言う。要するに昔の柳亭痴楽みたいな顔でも、あの生つ白い顔ならば七難隠していたのでしょうね。痴楽というのはものすごい面相の落語家です。『すごい色白なのです。私、好きだったのですけれども、』つづり方教室』というのをやった。痴楽がそれを言うとなにかすごいシヤレになっているよ。うな気がして、私はソクソクしたのですが、そういう白に対する崇拜はインドから日本に入ってきているものの中の一つだと思ひます。

余計なことですけども、同行二人という意味なのですが、あれは八十八カ所めぐりをやつて、空海を念じながら回っている間に空海と対話ができる。

歩いているうち、あるいはお堂でお参りしている最中、寝ているときでも夢枕に立ってほしい。そういう格好で空海と接触できた人は同行二人がなかったと思うわけですね。一周回って駄目な人はまた回る。また回る。空海に会えるまで続ける修行なのです。インドでもそういう聖地めぐりや神との対話をやるうということ、修行、一般の人も含めていまだに残っています。インドでは神と口をきいたという方が結構います。

インドの冗談を一つ紹介します。ある時、ラケイシュさんというインド語で名前が付いている方が神と対話することができたと。神と対話した時に彼が何を聞いたか。先ほどタタの車の話が出てきましたけれども、あれはインド語では非常に都合がよくて、10万のことを「ワンラック」と言うのです。ワンが1で、ラックが10万の単位。これは英語の研究社の辞書なんか引きますとLAC、あるいはLAKHで10万というのが出ていますから、一部英語にもなっております。「ワンラックカー」と言うのです。今、円に換算すれば30万円弱という格好になります。ラケイシュさんが神に「神様、あなた

にとつてワンラックというのはどういう意味合いのものでしょう」と聞く。神様は厳かに「ま、君らにとつての1秒みたいなものだろう」と。こう宣わたたわけです。さらにラケイシュは曇みかけて、「神様、あなたにとつて百年というのはどういう意味合いのものでしょう」。神様曰く「君たちにとつての1秒みみたいなものだろうね」と。ラケイシュが最後に「それでは、神様、済みませんけれども、私にワンラックルビー与えてください」と頼むのです。神様は破顔一笑「いいでしょう。ただし、3秒待ちなさい」と。要するに三百年待ちなさいと言われたわけです。こういうインドのジョークがあります。要するに神にとつての時と人間にとつての時、インド人は非常に關心のあるものだと思います。

それに関わつて、日本もそういう話が幾つかあります。そんなことをここで話すのは本意ではありませんが、番頭さんがどうも使い込みをやつていらしいなあということを感じたご主人がある時、集金の帰りに向島の堤を歩いてくると、向こうで紫の鉢巻きをして踊りながら来るのがある。よくみる

と番頭さん。それで「お、番頭、何をやっているんだ」と言ったら、番頭さんパツと気がついて、ご主人なので「お久しゅうございます」と言うのです。「お久しゅうございます、何を言っているんだ。今朝会ったばかりじゃないか」「いや、ここで会ったが百年目」と。こういう落語がございしますが、日本人でも時というのはそういうものがあるのじゃないかという気がします。

日本の総合力が参考に

今年の2月のインド大使館の調べでは、インドに進出している日本の企業は555拠点、427社が30社ぐらいいです。中国に比べると100分の1か50分の1でしょう。中国は2万社以上出ていると思います。拠点にしたらかもつとあると思います。そういう意味ではまだまだインドに対する出方が足りないという気がします。ただし、最近、インドの日本の間で起こっていることは、先ほど会長からお話がありました。タタが日本の東京と大阪で上場しようということを決断しております。それから最近、ニューデリーの

スズメの間で話題になっているのが、ヤマハという日本のオートバイメーカーが進出して、オートバイをつくっています。一番大きいのはヒーローというグループとやっているホンダですが、その次にバジヤジというインドのオートバイメーカーがあつて、その次の次あたりにヤマハがある。そのヤマハ・インド社長の石川さん（知孝）。この方はインドが非常に好きな方で、日本人会長も務めた経験がある。バイク気遣いの方です。この方が約5年の勤務を終わり、本社からヤマハへ帰ってこい。帰ってきて、浜松でマリンをやれと言われたのです。それで辞表を叩きつけてヤマハを辞め、インド第2のオートバイメーカーのバジヤジに常任顧問で4月から転職しました。そういうことが起こっています。

ヒーロー・ホンダはインドで一番大きなオートバイメーカーですが、この日本人じゃなくて、インド人の重役にインタビュをした。「あなたにとつてホンダはどういう意味がありましたか」という質問。そのインド人が「われわれインド人は一つ一つの分野では世界中どこの国の人にも負けないだけ

の資質や能力を持っているし、磨けばそうなると考えています。けれども、ホンダのやり方を言われたとおりにやると総合的に会社がズブズブと前進していく。この日本人の総合力というものは今までインドになかったものです。これがわれわれにとって最大の収穫です」という答えをしているのです。バジャジも同じようにインドの会社ですから、インド人であるんな分野でやることはできる。しかし、そういう総合力では日本にかなわないことがわかったからこそ、日本のオートバイメーカーのトップをアドバイザーとして持つてくることをやり始めた。そんな気がするのです。

それから私は現在、先ほども言いましたように三井化学と出光との合併会社で、プライムポリマーという会社があります。その会社のインド工場の立ち上げのために行っているわけですが、そこへ三井化学の藤吉（建二）社長、1月だったかまいりまして、われわれの工場のサイトをみました。で、隣の土地をみて、「ここ土地はどうなっているんだ」「空いています」と。後ろみて、「後ろどうなっているんだ」「空いています」と。「どうせ億の単位の話

だろう。買っちゃいなさい」「だけど、社長、この土地は公団から買いますので、2年以内に工場建設をしなきゃいけない」「2年以内に何をやるかと決めればいいんだろう。インドはもうそういうマーケットだろう」と。その社長の一言で買いました。3月までに支払いが終わっています。4月から土地代金が倍ぐらいになったのです。いい買い物なさったと思っています。今、インドでは何をやっても儲かる時期にあります。2年以内にやるものが決まらないような日本企業はありえない。土地があれば必ず考えます。それをやった三井化学の社長というのは、私はすごい決断をする方だな。今までの日本企業にない決断をする方だなと思って頭の下がる思いです。ああ、インド^aをやってきてよかったなあという感じを持っています。

タタが東京の株式市場に上場する。大阪に上場するというのは一時的なことではなくて、タタ全体にとって日本は将来大きなマーケットになるぞと。要するに資金の調達ではなくて、インドにとって日本が非常にいいマーケットになるぞという読みがあるからに違いないので、このタタの決断もすごい

ものだという気がします。

今、この世界で起こっていることを皆さんちょっと反省してみる必要があると思うのです。どういう意味かというところ、私はこの21世紀を「お化けの世紀」と名を付けています。なぜお化けの世紀かというとまだみたことのない世紀だからです。何が起こるかわからない世紀だからです。口では「過去30年に起こったような変化が5年以内に起こるのですよ」という言い方をしているけれども、本当に実感しているのでしょうか。例えば今現在、日本ではおもしろおかしく、ねじれ、ねじれ^aという言葉が使われておりますが、ねじれを解消するために次の参議院選挙¹ 2年半後、さらにその次の参議院選挙² 5年半後の選挙までやらなければ、ねじれの根本的な解決にならないわけですね。そうするとこれは一時的な現象ではない。2・5年、5・5年という期間を考えると、それは日本企業にとっては中期計画の中の話じゃないですか。これをあたかも一時的な現象として捉えようとしている日本のマスコミだとか、ジャーナリストというのはちょっと読みが浅いのじゃないか。

例えば先週から今週にかけて世界で何が起こっているか。オリンピック聖火のことを私は言っているのです。あれはたまたま英国で起こったこと、たまたまフランスで起こったこと、たまたま今朝、サンフランシスコで起こっていることだと一時的な現象と取っていいのでしょうか。やっぱり中国は上海万博まで行く間にオリンピッククサえ危うくなってきた、何かが起こるのじゃないかという前兆としての捉え方、そういう心の準備が必要なのところに今われわれはいるのじゃないか。21世紀「お化けの世紀は、20世紀の続きで解釈していいのはこの2008年までで、あるいは2007年までで、今年からは21世紀に入り、未知との遭遇をわれわれはやっていかなければいけない。それが日本のマスコミがアメリカのサブプライムローンに関する現象を「バブル崩壊」という言葉を使って説明したがない。この一時しのぎの考え方。サブプライムローンの崩壊というのは日本のバブル崩壊よりももっとひどいわけです。というのは銀行から金を借りて住宅を買っておけば、値上がりで金利なんかすつ飛んじやう。そのくらいの楽ができるから、と庶民はみんな

だまされて家を買わされたわけです。ちょうどバブルの末期のころに銀行がお膳立てしますから、ゴルフなんかできなくてもいいのですから会員権買いなさい、と言ったのと同じ現象が起こって、今その結果が出ているわけです。それがあたかも大統領選挙が終われば終わるかのとき期待を込めて、一時的な現象として捉えている日本のジャーナリズム、エコノミストたちというのは私はちよつと軽すぎるのじゃないか。もつともつとひどい状況のとは口になれわれはいるのではないかと考える必要がある。

その中でインドの世界史に対するコミットを考えてみたいと思うのですが、ブッシュ大統領はなぜそういうことをやったかという背景は私はいまだにわからないのですが、インドに対して原子力の平和利用についてアメリカは全面的に協力しますと言ったのです。ブッシュが言ったからこれは野党が反対するのかなと思つたら、アメリカの上院の可決もオーケー。今、インドはインド共産党を説得して、これを受けようとしています。それをみたブーチンはインドの発電所2カ所の技術援助をやりましようと言ったので

す。アメリカよりさらに具体的ですね。フランスのサルコジもインドの原子力発電所の協力を惜しまない。豪州はウランのサプライをコミットしますと言っているのです。今、電力というエネルギーに関して、あるいは原子力というエネルギーに関して、アメリカ、ロシア、フランス、豪州からのサポートを取っている国、世界中見回してどこにありますか。インドだけです。

それから先ほどの聖火問題にここでまた戻るわけですが、ダライ・ラマが今、インドのダラムサラというところに住み着いて、避難民として生活を送っている。それでダライ・ラマがいろんな騒動の元凶だと中国は言っているわけですね。それならば今までの流れからすると中国は声を大にしてインドに対して強烈な非難をするのが当然なのですが、中国はインドに対してこの問題に関して一切何も言っていないです。ダライ・ラマを飼っているとは言いませんよ。ダライ・ラマが住んで生活する場をインドが与えているにもかかわらず、そのインドに対して中国は何も言っていない。そのくらいにインドの力を中国は認識しているということですよ。

さらにもう一つ付け加えると、インドの現在の大使は堂道（秀明）さん、あの中村（聡志）さんが捕まった国の大使をやっていて、最初は数週間で釈放されるのではないかとということで、堂道大使は日本に帰るのを遅らせたのですが、にっちもさっちもいかないというのがわかって、任地を離れて東京へ帰ってきて、今、インド大使で行っていますが、中村さんは半年たつても釈放されないのです。中近東のイスラム原理主義者はアルカイダとかなんかいろんなものがありますが、インドをテロの対象国にしていないのです。残念ながら日本はその対象国に入っています。そうするとこの世の中でアメリカ、ロシア、中国、フランス、豪州、こういうところと仲良くやってきている国というのはインドぐらいしかないのです。地政学的にもものすごく安定しているのです。もちろん日本も政権の変更は起こっても、政治的には非常に安定した国です。インドも政権交代はあるかもしれませんが、政治的には非常に安定した国だと言えると思います。そういう国の成長を先ほど会長からも言及がありましたBRICSsという名前で言われて、その中でインドが

6%から9%ぐらいの成長率で今後10年は安定的に成長していくだろうというのが大方の世界のシンクタンクの見方です。そういうところに日本企業がコミットしていかないということは、今の経営者がもし何もしないのであれば、それは三菱商事の昔の社長の藤野忠次郎が言っておりました「不作為の罪」に問われる。今こそインドに出ていって投資をすべき時期にわれわれはいるのじゃないかなという気がします。

レベルが高いソフトウェア

インドもITだとかすごく喧伝されています。アメリカはご存知のようにカーネギー・メロン・ユニバーシティにソフトウェア・エンジニアリング・インスティテュート、頭文字を取るとSEEIとなるのですけれども、ここに對して国防相が金を出して、世界のソフトウェアメーカーのランキングをしないということを頼んだわけです。なぜそうやったかという国防関係のソフトウェアの開発を頼む時にランキングがなければ、どういう会社にソフ

トウェアの開発を頼んでいいか目安がつかないということで、ソフトウェア開発会社のランキングをやってくださいと。レベル1から5、5が一番上なのですが、5の会社に分類された会社はインド企業が70%です。25%ぐらいがアメリカの会社で、日本も2、3社、最近は入っています。中国の会社も入っているし、豪州の会社も入ったりしていますけれども、圧倒的にインドの会社がレベル5。ということは国防関係のソフトウェアの開発を頼むのはレベル5のところに関心なさいということになっていますから、インドの会社はそういう開発事業に易々と入っていただけるわけです。

ですから1998年にインドが核実験をやった時にアメリカをはじめほかの先進国はどこも驚かなかったのです。というのはインドのSE（システムエンジニア）というのはアメリカの企業に非常に深く入り込んでいますから、ハックもなにもない。アメリカのソフトウェアの開発をやっているのはインド人だと言っても過言ではないくらい入り込んでいます。その当時の数字ですけれども、マイクロソフトやIBM、今は中国の会社になってしま

ましたけれども、20%から25%がインド人、NASAの35%がインド人と言われていた。こういうところにインド人が入り込んでいますから、アメリカの金融業界からジュー（ユダヤ人）を除いたら金融業界が動いていけないので、イスラエルの問題がどんな格好で出てきても、アメリカは安全保障理事会で拒否権を使うわけです。世界はそれを理解しているから、アメリカが拒否権を使っても、うん、そうか、またか、と言うだけで、それ以上の反応はしません。実はインドに関してアメリカはインドのSEがいなかったら今のアメリカの最先端技術が動いていけないというのはよくわかっていますから、インドに対する配慮は大変なものです。それが現職の大統領、クリントンが5日間もインドに滞在した理由なのです。1987年にインドが核実験をした後、一年半にわたって、タルボットとインドの後の外務大臣になるシン氏とが6回にわたってアメリカとインドで徹底的にこの青い宇宙船地球号のことについて話し合っただけです。それ以降、アメリカはインドの意向を無視しては世界戦略は立てられないくらいにまでなっただけです。というのはアメ

リカの最先端軍事を握っているのはインド人ですから、インドの意向を無視しては何もできないような状況です。それが先ほど言ったプツシユの原子力の平和利用に関する技術は何でも出しましょうというところにまでつながってきているわけです。そういう読みを日本のジャーナリストはやっていない。断片的にインドのことだけをおもしろおかしく日本に伝えているのが日本のエコノミストであり、ジャーナリストという気がするのです。

橋本龍太郎さんの時にインドはその原爆をやったわけです。橋本さんという方はとても記憶力のいい方だったから、インドが核実験をやったら中国に対してわれわれが取ったのと同じように「無償援助停止」ということを即座に言ったのです。やった次の日。ところが、こここのところで特落ちがあります。私はいつも言うのですが、最近の特落ちを二つ。

一つは、福知山線。福知山線を通っている方は、あれが何両編成の電車とこののはよくわかつています。上からヘリコプターでテレビ局などマスコミが写真を撮っている。自分が乗っている車両数がわかつています。あれは7両編

成だったと思いますが、外に出ている残骸が5両。だからマンションの中に入り込んでいるのは2両だなと引き算すれば誰でもわかる。ところが、すべてのマスコミが最初から3日間、中に入っているのは1両と発表したのです。3日目になってようやくJRが、中に入っているのは2両だと言いだしたので、マスコミは何も言わず、その日から2両中に入り込んでいると成った。日本のジャーナリストはそういう基本すらやっていないのです。

それと同じようなことがインドが核実験をやった時にジャーナリストも、外交官も誰も駄目を取っていないのです。「今回の実験はききうで終わりますか」ということを誰も聞かなかったのです。もちろん聞けばインドはきちっと「いや、関連の実験がまだあります」と答えたと思うのに、誰も聞かないから答えない。橋本さんは翌日に無償援助停止と言っちゃった。言った翌日にインドはまた実験をやった。一連の実験が終わっていないかったのですから、中間発表の時に橋本さんは無償援助停止と言っちゃった。そして無償援助停止と言って怒りを露わにしたにもかかわらずまたやられたから、その時、

橋本龍太郎さんは「円クレ（円クレジット）中止」と言わざるをえなくなっ
 ちゃった。そうすると冷静なインドは怒ったわけです。隣国中国に対しては、
 中国が核実験をやったことに対して日本は無償援助停止という措置で止めて
 いたにもかかわらず、日本の友好国であるインドに対しては円クレ停止まで
 いくのかとカンカンに怒った。それ以降、橋本龍太郎さんが何回インドに行
 っても、要人に誰にも会えない。そういう事態になりました。

その後、森（喜朗）さんが修復に乗り出して、「グローバルリレーション」
 という言葉、森さんの作文能力から出てくる言葉ではないので、おそらく周
 りの官僚がつくった言葉だろうとは思いますが、「グローバルリレーショ
 ン」というのをつくりまして、小泉（純一郎）さんの時代に、それをさらに
 「戦略的な関係」といつところまでいって、安倍（晋三）さんは腹に力を入
 れてもっと踏み込むかなと思ったら、ちょうど下痢が始まっていた時で、あ
 れ大変だったのです。要するにインドに入る前からおかしかった。何も入ら
 ない状態で、点滴でもって安倍さんはフラフラしながらインドへ行ったので

す。それで安倍さんが泊まったオペロイホテルには和食の板前さんがいないのです。その当時はメトロポリタンニッコーホテルというところには板前さんがいたので、ニッコーホテルから和食を取り寄せてというので、上を下への大騒ぎになったというのを聞いております。そんなことを報告していると時間がなくなるからやめますけれども、安倍さんは日本を出る時からおかしかったのです。それで帰ってきて、ああいうふうになっちゃったのです。

したがって、安倍さんは踏み込んだところまでいかなかったのですが、いってみれば日本とインドは官僚というのはすごい。条約を結ぶと国会の承認が必要で、政治がグタグタ、グタグタ言うのですけれども、例えば準同盟国というような考え方は官僚同士が話し合えばできるのです。今はインドと日本の間はグローバルパートナーシップから戦略的になって、特別な経済関係、それを全部総合すると、官僚の世界では準同盟国扱いまできちちゃっているのです。政治家はまだそこまで日本とインドの関係が踏み込んだものになっているのを気がついていないだけで、官僚はすごくしっかりしていると思いま

す。官僚は今まで日本とインドの関係を非常によく緻密に考えていまして、そういう方向に動いていますから、インドと日本の関係に関しては今の官僚がやっていることに私は諸手を挙げて賛意を表したいと思っています。

興味示すムンバイ・デリーコリドー構想

小泉さんの時に新幹線はどうですか、お土産にということまで打診をしたのです。そしたらマンモハン・シン（首相）はちょっとスケールが違うと思うのです。インドで人が移動するには新幹線もいいけど、広すぎる。人の移動は飛行機で十分だ。しかし、貨物は汽車を使いたいね、ということでも貨物という言葉が返ってきた。それに対して日本は冷静にインドを分析しまして、ちょうどインドが日本で言う60年代の初め、オリンピック前夜だねということとを官僚は歴史の中から引っ張り出して、そうすると64年、新幹線の開通と東海ベルトの工業化。ちょうど今、その結果が日本の歴史に来て、求人雇用倍数が一番いい中京というところが生まれているわけですが、あれはいつて

みればトヨタというだけじゃなくて、東海ベルトの開発構想、役人が考えたものだと思います。これが実現して、しかも、それがちょうどトヨタと乗ったという格好で今、結果が出ているわけです。こういうものを想定して、インドにつくろうということ、ムンバイ・デリー間、ムンバイ・デリー・コリドー構想ということで、これにはムンバイ港で揚がる貨物を2階建てコンテナで輸送をして、ムンバイとデリーの間をコリドーをつくって、とインド側に提案した。インド側は最初、またどうせ日本が作文工作をやってきたのだらうと思ってみたのだが、その構想をみてびっくりしたのです。これは面白いということ、インド政府もこのムンバイ・デリー・コリドー構想に非常に興味を示したのです。ここを何とかしてやればインドと日本の関係は非常に緊密になり得ると思えますので、このムンバイ・デリー構想にぜひ皆さん関与するような格好にしてもらいたいです。

インドが今、一時的に日本でブームになっているのではないのです。インドを狙っているのは日本だけではなくて、いや、むしろ日本はインドを狙っ

てなくて、ベトナムと比較して……なんていう格好の議論がまだ行われたりしている。あるいはパキスタンと比べてどうかなんていう議論が行われたり、そんな問題じゃないのです。インドは世界史の中からこれからコミットしていったら、先ほどの宗主国のジャガーを軒先借りたのを母屋を取っちゃったように、こういう逆転現象がどんどん起こってくる。例えばカルカッタでも私がまだ三菱商事でヨチヨチ歩きをしている時に、ミタルなんていうおっさんといういろいろ話し合って、何だ、そんなライセンスで世界に輸出なんかできるものかとかなんて議論をやっていた相手が今、世界の鉄鋼王になっているのです。これは一時的な現象じゃなくて、あらゆる方面でそういうインドのこの地球に対するコミットが始まっているきざしを感じる。そういう読みがインドに対して必要なのだらうと思いますので、ぜひインドにコミットをするような方針を各会社内で立てていただきたいと思います。三井化学の社長の決断のような大英断ができるような格好にしてもらいたいと思います。

インド人は「ハイリスク・ハイリターン」という言葉を好んで使います。

日本は「ハイリスクヘッジ」と言っちゃいます。その一番惨めなのは商社活動です。為替も、投資に関してもリスクを取らない。リスクがあればどっかにヘッジするというように動くようになっちゃったのです。日本はそんなに金持ちなんでしょうかね。まだまだ打って出て、リスクはあっても冒険しても、やっぱり日本の国の先行きを考えたら投資をやっていかなければいけないし、新しいことをやっていかなきゃいけない。それがお化けの世紀に対する態度だろうという考え方を私はやっていくべきじゃないかなという気がします。

インドというところをマーケットとして考える時に、どんな考え方をしたらいいかということについてちょっとお話をしたいと思います。インドは今、人口が統計によって違いますが、推計によると11億5千万人ぐらいいる。あと20年ぐらいたつと中国を追い抜いて、世界最大の人口国になる。25歳以下が半分以上を占めている。すごいマーケットです。商業大臣のカマルナートさんいわく、インドには2億5千万から3億の可処分所得を持った人たちが

いるというのです。話半分と聞いても1億以上はそういう層がいる。そういうセグメントがある。それを前提に考えた時に日本で1億のマーケットというのはないので。可処分所得を持っている人は7千万か8千万か、そんなものでしょう。だったら日本のマーケットに入れる力と同じぐらいの力をインドにそそぎ込んで、インドのマーケティングをやる価値があるわけです。そういう出方をしたところは成功しています。

その典型的なものは韓国の白ものメーカーです。洗濯機、電子レンジ、そういう白ものは全部LGとサムスンが押えています。日本は先ほどのハイリスク・ハイリターンの方で、リスクのあるところはヘッジということ非常に安全性をみてなんていうことで、まず第一に原宿にアンテナショップをつくってみましょう。ここでうまくいったら全国展開をなんていう。インドにアンテナ工場をつくって、その生産の結果をみてなんていうことを考えたのが電機屋さんで、ここにそういう関係者の方がいらしたら非常に失礼なことを申し上げる結果になると思いますが、そういう出方をしたところ

は全部軒並みに失敗しています。頑張っているところもあります。例えば日立はエアコンでつくった工場を閉鎖に持ち込まない。どっどんやっていこうじゃないかと頑張ったりしているところもありますが、パナソニックにしろ、ソニーにしろ、シャープにしろ、サンヨーにしろ、東芝にしろ、家電部門は全部韓国に負けています。

インド進出は全社を挙げて

ところが、日本でもインドマーケットは大変なマーケットなのだ。インド全体と相撲取らなければ駄目なのだという覚悟で出ていった鈴木修さんだとか、ホンダだとか、トヨタだとかは大成功しています。さらにその成功は大きなものになっていくでしょう。だからインドマーケットをそれなりに評価して出ていったところは成功していますが、片手間に試しにお前の部局でやってみるなんていうのは駄目ですね。トヨタも最初にトラック部門が出ていって、見事に撤退して、4輪・乗用車で出ていく時は全社プロジェクトで出

ていって、今、成功しているわけです。インドに出ていく時は全社を挙げてそういう出方をするのが正しいと思います。ただし、自動車の部品のベンダーをやっているのはサプライ先が決まっているわけですから、これまた別の話ですけれども、新しい業種に出ていく化学品であるとか、食品だとかというのはそういう覚悟で出ていかないといけないと思います。例えばヤクルトなんかは最近向こうに行って、ヤクルトお姉さんがいるのですよ。会社に来るのです。そういう覚悟でやっていったところが伸びていくのだと思います。

今現在、インドで注目されているのは日系のロジスティックの会社です。これは日新運輸をはじめNYK（日本郵船会社）、日立トランスポート、あとあらゆるロジスティックメーカーが向こうへ出ていっています。その中でNYKはやっぱりすごい会社で、信用があるんだなと思ったのですけれども、NYKが出ていくなら、じゃあ、うちのやつをやってくれませんかという日系企業が何社か出てきて、チエナイ（旧マドラス）とボンベイで自分の金で土地を買って倉庫をつくるのが間に合わない。今ある倉庫を借り上げて

でもやるうというところで、NYKは動き始めています。NYKは目のつけどころが違うなというのは、インドは日系企業だけじゃないぞと。タタと話をしたのですね。タタのトラクターだとか、そういう部門の輸出に関してNYKが取っちゃったのです。次の倉庫はボンベイと南のケララ州との間にあるブネというところに輸出基地をNYKがつくってやる。それから今、私が工場を建てているニームラナというところがニューデリーから120ⁿ南のラジャスタン州にあるのですが、そこに³³の土地を買って、インランドコンテナデポ、要するにコンテナのデポをつくるような計画もNYKはやっています。NYKに何でタタがインドの業者じゃなくて、おたくに任せようになったのか。私、率直に聞いたのです。そしてタタはNYKとの関係は100年以上なのです。イギリスに対抗してインド航路について一緒にやったのがその当時のNYKとタタ・ティという会社なのです。この関係ができてから、もう100年以上。その歴史的な関係とNYKの世界にわたるネットワーク、これはほかのインドの会社に比べて数段優れている。ですか

らNYKにお頼みするのですと。タタも非常に話がわかるわけです。そういう会社が出てきている。

これは先ほども言いましたように一時的な現象ではなくて、そういう格好でどんどん、どんどんインドと日本の間、あるいはインドが日本にコミットしてきますので、それをドンと受けて立ってほしいのです。あるいはインド側に新しいアイデアをぶつけてほしい。それには先ほど言ったインド全体ベースで取り組むということが一つ、それからインドをきちっと勉強することです。生半可なやり方では駄目なのです。例えば最近、インドでインド人がやって成功した例を二つ挙げます。

一つは、インド人というのはパーンというキンマの葉っぱで巻いた噛みたばこみたいのを噛む習慣があります。これを噛むと真つ赤な唾が出て、それをベツベツやるので、道路だとか、工場がすこく汚れる。これを禁止しようという動きがあります。そのウエットな部分を除いて、まっドライな部分だけをアルミホイルでつくったそれが流行り始め、それを思いついた人は

一大財産をつくって、大金持ちになりました。

もう一つは、日本ではTOTOという会社が水洗式を（ウォシュレット）つくりましたね。インド人も全部水で処理しています。日本で宗教大会が行われる時にアジアからたくさんの方さんが来るので、その時、方さんは紙を使わないのでどうしようというので、その時にどうやったかというとか大便のほうに日本は蛇口がありませんから、ビール瓶の水を入れて、それを各トイレの隅に置いたという応急措置を取ったのです。もちろんそれでもいいのです。インドで今、ペットボトルがものすごく売れているのは、ペットボトルが朝の始末の時に紙代わりに持って出かけるのに非常に便利だからという。日本でTOTOが出た時にこれは便利だぞということで、インドに持っていった人がいる。しかし、あれは非常に繊細な機械で、インドで大体10回使うと壊れちゃうという格好で、1回壊れるとその当時50万円ずつ飛んじやう。そういう状況でTOTOはやっぱ流行らないのじゃないかなと言っていたのです。しかし、インド人の頭のいい人がハンドシャワーというのを考

えだした。要するにハンドシャワーとは日本では頭にやるシャワーのことを言いますけれども、インドではお金持ちのトイレに行きますと蛇口が小さいお尻の局部だけに水を当てられるようなハンドシャワーができています。これが今、インド中爆発的に売れているのです。

この二つの例はインド人が考え出したものですが、インド文化を底から知っている人たちが考えたものだからインド人にぴったりのものです。TOTOのICチップが入っているようなものを持ち込んだら金もかかってしまうのではないのだけれども、そのハンドシャワーであれば、ほとんどそういう部分がないから非常に安くできるし、壊れにくい。これが今、すごく流行っています。この例のようにインドへ出ていくにはインドにないものをこれから紹介していかなければいけない。インドにあるものをつくったってしょつがない。インド人がこれから必要なものをつくるということにいいアイデアを日本がやればいいなあという気がしています。それにはインドをすごく勉強して研究してもらいたい。

例えば奥さんと旦那が共稼ぎで、高級な給料をもらっている人たちが子どもを育てる時に紙おむつを使うようになるだろうと。それでユニチャームだとかがインドに進出を考えているのです。インド人の生活を変えてしまうのです。今まではお金持ちの家でも子どもは下半身スッポンポンで、乳母に抱かせて、お粗相をしても別に何でもないという格好であったのだけれども、2人暮らしで共稼ぎなんていう家ではそんなことやっていられない。そうするとやっぱり紙おむつというのはインドでも1億のマーケットがあると考えれば、すごい可能性のマーケットなのです。そういうところに目をつけて出てくるところが出てきている。そういう意味でインドを見直してもらいたいなど。要するにこれは皆さんご存知だと思いますけれども、アメリカの靴屋さんが2人調査員をアフリカに出して、1人の調査員は誰も靴をはいてないからマーケットはないと報告し、1人の調査員は誰も靴をはいてないから無限の可能性ありという報告をする。インドはまさにそういうことでして、インドにないものでインド人のためになるようなものを紹介する気迫を持つ

て、日本もインドにノウハウを与えてやるべきじゃないかなという気がするのです。

~~~~~  
南無とナモーという言葉  
~~~~~

最後になりますが、法華経というお経がありますが、法華経を読むと日蓮だけじゃなくて、お亡くなりになった高田好胤さんもインドに行かれましたけれども、法華経の中には、一度仏教が生まれたインドで仏教が廃れる。それが東の国で再生して、インドへまた戻ってくるという予言があると言うのです。私は法華経を何回も読みますけれども、どこにそう書いてあるのかよくわかりません。けれども、おそらくそういう偉い方が言うのだから、そのとおりでしょう。今、日本の仏教をインドへ持っていくということは南無妙法蓮華経だとか、南無阿弥陀仏だとかというものを木魚を叩いて、団扇太鼓叩いてやるべきことかというところ、そうじゃないと思うのです。団扇太鼓叩いて、木魚叩いて、向こうの人が何だ、お祭りか、チンドン屋でも来たのか

なという認識しかない。南無という言葉、インド語では「ナモー」と言いますが、帰命するという意味です。だから南無妙法蓮華経というのは法華経に私は命を捧げます。南無阿弥陀仏というのは阿弥陀に私は全部お任せしちゃういますよと。そういうことを言っていることなのです。インド人も「ナモー」という言葉を使います。

日本が今、ここまで来られたのは日本人の根底に仏教の影響を受けて、仏をつくって魂を入れるということをやって、戦後、アメリカが紹介したQC運動、クオリティーコントロールなんていうものをアメリカは検査のほうへ持っていった。日本は検査やインスペクションじゃない。これはQC運動に喝を入れて、仏にしちゃう、思想にしちゃう、道にしちゃうという考え方もあって、今の日本の近代産業があると考えたと南無妙法蓮華経や南無阿弥陀仏をインドへ持っていくということじゃなくて、今、日本がここまで来たこの結果をインドにさらに紹介して、インドが忘れていた部分、あるいは人類がこれから進むべき方向をインドと日本で協力して模索していくとい

うことがもう一度、インドへ仏教が立ち返るということじゃないかなと私は思っています。そういう意味で日本企業のインドに対するコミットはもう少し積極的にあつたほうがいいのじゃないかなという思いを込めて、きょうのお話は終わりにしたいと思います。(拍手)

○質疑応答

質問 大変貴重なお話ありがとうございました。昨年、資料を調べていたらインドの海軍がアメリカとか豪州と共同訓練をしたというニュースがありました。それがあつた直後に、昨年暮れ近くだったと思いますが、今度は中国の陸軍とインドの陸軍が共同訓練をしたという資料を読んだので非常に驚いた記憶があります。インドの人全般として周囲の国に対してどのような感覚を持っているのか。いろんなランク付けがあるのか、それともバランスよくすべての国と付き合っていくという考え方があるのか。もしランクがあれば、その中で日本はどれぐらいの、どのような印象の国であるのかとい



うことについてお聞きたいと思います。

清 インドの外務省、あるいは内務省の中には国のランク付けがあります。一番親しい国は日本になっています。聞いていくとアメリカなんかもあって、一番注意しなければならぬ関係先として中国がトップに上がっています。さらに英国はどこにあるのと聞くと、「あれは番外だ」と。あれは特別な関係だから日本よりもっと上にあるのですね。英国との間は表面的にはギクシャクするようなことがあったとしても、お互いに腹の底では非常に理解し合っている。

もう一つは、中華思想という言葉があ



会場風景

りますが、インドも自分たちが世界の中心だという自負があります。これはインド人は賢いですから人の前では言いませんが、自分たちが世界の中心。世界の中心だから、自転車のスポークじゃないけれども、いろんな国と等間隔でもって関係を持つていくのが正しいいき方だと考えているようです。このインドの外交政策は非常に知恵の深いものがございまして、われわれも学ばなければいけないんじゃないかなというような気がします。幸いなことに防衛省も含めて日本の官僚は非常に正しいインドを理解していると思いますので、官僚機構の中でのインド

と日本の関係というのは今のまま進めていただいて結構だと思います。外務省に日印関係の基本的な理念はどうなっているのだと防衛省のほうが聞けば、必ず正しい回答を言ってくれるだろうと思います。

(平成20年4月10日 東京懇談会で収録)

編集後記

… BRICsの新興経済大国の一つインドは、いま世界の注目を集めている。東京懇談会4月例会は、そのインドの事情通として知られる清好延さんをお迎えし、「インドで成功する秘訣は」の演題で講演を伺った。BRICsに共通していえることは豊富な天然資源、労働力となる膨大な人口が経済成長の源泉であるという。特にインドは国土面積が世界7位、人口同2位とすば抜け、社会主義的経済と決別し経済改革を進め、金融市場も安定感があると聞く。近年のソフトウェア産業の急成長は目を見張

るものがある。

…そのインドに21年有余携わってきた清さんの生活は年2回、2週間ほど休暇をとって帰国する超多忙。その合間での講演は、これからインドへ進出しようと考えている企業の参会者に関心を持たれるのは当然のこと。まず、インドについての間違った情報を流すジャーナリストやエコノミストを信用するなど警告する。

…「いま、インドでは何をやっても儲かるとき」と嬉しいお話だが、成功する秘訣の2点を強調し、生半可な取り組みは失敗への道と耳に痛いことも…。(H)

じゅん刊 世界と日本

平成20年5月1日発行 第1114号 定価630円(消費税込)

代表者 清宮 龍 発行人 林 宏 発行所 (株)内外ニュース

住所 東京都千代田区永田町2-10-2 郵便番号 100-0014

電話 東京 3580-1264 FAX 東京 3508-1070

E-mail : naigai@ga3.so-net.ne.jp 振替 00190-7-54604

印刷・製本 (株)連合印刷センター

じゅん刊 世界と日本

- 1101.....特集 変わる医療の正しい利用法 岩渕 勝好
来年度から健診・高齢者の新制度 -
- 1102.....対談 「健全な保守」で政界の再編へ 平沼 赳夫
新しい政治を目指して - 清宮 龍
- 1103.....特集 大きな可能性秘める日本の海域(上)..... 寺島 紘士
「新たな海洋立国」へ政策・体制を一元化
- 1104.....特集 「海洋力」を問われる21世紀(下)..... 寺島 紘士
「新たな海洋立国」へ政策・体制を一元化
- 1105.....国防論 平成十九年版 石破 茂
長島 昭久
松田 康博
洗 堯
金田 秀昭
高橋 健才
- 1106.....講演録 醤油は世界“融合料理”の先兵 茂木友三郎
アメリカ社会に根付いたキックマン
—— 進出50年の節目に思う
- 1107.....特集 イノベーションの未来像 森谷 正規
突破できるのか！4つの壁
- 1108.....対談 与えられた衆院三百議席は尊い 森 喜朗
今年の政局 - 清宮 龍
- 1109.....特集 教育基本法の改正と日本の精神復興 市村 真一
- 1110.....対談 総理を“静かなる仏”と呼ぶ 武部 勤
次は国会改革を - 議員定数大幅減へ - 清宮 龍
- 1111.....特集 「ねじれ国会」を憂えるなかれ 本田 雅俊
今こそ機能させるべき二院制
- 1112.....対談 中選挙区制に戻す覚悟と決意を 古賀 誠
当面の政治 - 清宮 龍
- 1113.....特集 「不在」や「拒否」で回収率が低下 氏家 豊
世論調査結果は社会の羅針盤